

ソ連・東欧体制崩壊とユーゴ崩壊 そしてEU

大谷美芳(19.12~20.01)

過日、岩田昌征さんが報告した、世界資本主義フォーラム「東欧体制の崩壊と市場経済化」に参加しました。以下は、そこでまとめた考えです。

報告は、ソ連・東欧体制の崩壊を、「市民革命と性格規定することの誤りが明白」としています。「政治革命とは、新しく誕生しつつある正統性の社会的担い手集団と古いが未だ余力を保っている正統性の社会的担い手階層が正面衝突して、新集団が旧階層を政治的に打倒する事を意味する。」「前者の社会集団も後者の社会階層も存在していなかった。」

ソ連・東欧体制の崩壊の世界史的にどう見るかは重要です。ブルジョア革命である、それがロシアと東ヨーロッパは 20 世紀になった、この論点で私の意見を言います。

①ソ連・東欧体制の崩壊は民族革命

ソ連は、対内的には大民族のロシアが少数諸民族を抑圧し、対外的には東ヨーロッパ諸国を従属させ、帝国主義でした(基礎は官僚制国家資本主義)。崩壊した要因は、1.「計画経済」=統制経済が桎梏となった経済停滞、2.東ヨーロッパおよび国内の少数諸民族と人民の民族闘争と民主化闘争、3.アメリカとの世界覇権争闘=冷戦の過重負担、でしょう。だから、ソ連の崩壊は、社会主義の崩壊ではなく、帝国主義の崩壊でした。

東ヨーロッパとバルトや中央アジアの諸国は、国家的独立を実現し、民族革命でした。すでに独立していたユーゴなどもソ連の脅威からは最終的に解放されました。

階級対立に基づく社会革命ではなく、帝国主義・抑圧民族と従属国・被抑圧民族の民族対立に基づく革命でした。確かに「下から」の人民闘争はあったが、基本は官僚ブルジョア階級が主導し「上から」「なし崩し的」でした。だから、「正面衝突」「打倒」にはなりません。

②ソ連・東欧体制の崩壊はブルジョア革命

ロシア革命は、ブルジョア革命で終わりました。工業化と機械制大工業を管理・運営する必要から官僚と官僚主義が登場し、官僚が国有の生産手段を独占して労働者階級を搾取・支配し、官僚制国家資本主義と官僚ブルジョア階級の独裁へ変質・転化した(農業集団化は農民収奪と資本の原始蓄積)。スターリン主義体制です。東ヨーロッパも、官僚制国家資本主義でした(ユーゴも産業と国の全体は官僚が管理)。

官僚制国家資本主義は、20 世紀の後発資本主義が通る道と言えます。「計画経済」=統制経済が発展のテコから桎梏となった時点で市場経済への移行が必然です。ソ連・東欧は、そこで体制崩壊し、私的資本主義(報告にある「略奪的私有化」と「買弁的売却」とブルジョア民主主義(これは「下から」の人民闘争の結果だが現在は権威主義が顕著)となりました。中国・ベトナムなどアジアでは、体制を維持した市場経済への移行に成功し(その根拠は報告にある「近代主権国家の確立」の「正統性」)、現在、経済発展しています。

ソ連・東欧体制の崩壊は、ロシアと東ヨーロッパにおける二度、三度と連続するブルジョア革命と見るべきでしょう。西ヨーロッパのブルジョア革命もそうでした。

③20世紀のブルジョア革命と資本主義化の先に21世紀の社会主義革命を見るべき

韓国・台湾やASEANは開発独裁で新植民地主義的従属から脱却しました。これに対して、先発のアメリカ・西ヨーロッパ・日本は金融資本主義化しました。20世紀はブルジョア革命と資本主義化の時代、ソ連・東欧体制の崩壊はその一環と見るべきです。

現在のグローバリズム、つまり資本主義の世界化を見ると、資本主義は社会発展の必然であり、資本主義の矛盾が発展して社会主義革命を必然化する、このマルクス主義の原理は21世紀において、依然として有効である、と考えます。(2019.12.10)

その後、岩田昌征さんの『20世紀崩壊とユーゴスラヴィア戦争』を読みました。

「多民族、多宗教、多歴史、そして多文明をユーゴスラヴィアという連邦国家に『友愛と団結』させていた2つの接着剤、自主管理社会主義と非同盟政策とは、ともに耐用年数が過ぎひからびてしまい、その粘着力を失ってしまった。……このような状況に不死鳥の如く蘇ったエトヴァスがある。すなわち、社会生活や政治生活の表面に出ることをそれまで許されなかった民族主義であり、伝統であり、宗教である。」(p45～46)

ユーゴ崩壊だけでなく、ソ連崩壊も、またEUの分解傾向についても考えました。

①なぜ「自主管理社会主義」は民族主義を超克できなかったのか？

「1980年代を通して、対西側債務の重圧に直接起因する経済危機にあえいでいた。……経営者社会主義、あるいは経営者資本主義を目指す改革を模索しはじめていた。」(p124)

「誰が勝者、つまり資本家(所有者)に成り上がり、誰がそのような新しい資本家に雇用される賃労働者(無産者)に成り下がるか。」(p129)

「社会有財産→国有財産→私有財産という所有形態の急転換に必然的に伴う、階級形成闘争、すなわち社会有財産と国有財産のぶんどり合戦の相で考察する。」(p160)

労働者自主管理は、「基礎組織」「労働組織」「連合労働組織」の三段階で管理・運営していたが、企業レベルに止まっていた。産業と国の全体は官僚が管理・運営し、社会主義ではなく、やはり官僚制国家資本主義であった(国家は人民民主主義独裁のブルジョア階級独裁への変質)。ミロヴァン・ジラスの「新階級」批判は早くも1957年であった。

連邦国家と言うが、実質は国家連合であった。その各国で、「ぶんどり」=強奪で「階級形成」して私的資本家が登場し、私的資本主義化した。そこから民族的対立を深め、1990年代に次々に分離・独立していった。

民族主義は、「表面に出ることを許されず」、制度的に(とチトーの権威で)抑制されていた。しかし、それを超克するのは、民族を超えたプロレタリア階級の「友愛と団結」であり、それには、その基礎として、労働者自主管理を産業と国の全体に拡大していくべきであった。長期の過程となるが、それが社会主義(国家はプロレタリア階級独裁)あり、その社会主義の国家連合である。それができなかった。その主客両面での総括が必要だろう。

②ソ連崩壊は帝国主義の崩壊 分解傾向のEUに対するプロレタリア階級の態度は？

ソ連崩壊は、社会主義の崩壊ではなく、帝国主義の崩壊であり、歴史的進歩であった。東ヨーロッパの従属諸国と国内の被抑圧少数諸民族が国家主権と民族独立を達成した。

現在、加盟各国で反EUと排外主義が台頭している。独仏枢軸とりわけドイツ帝国主義の支配はある。しかし、その中心は金融資本主義の支配、緊縮財政による格差拡大や福祉・社会保障の切捨や貧困化などであり、国家主権と民族独立の侵害とまでは言えない。現状では、EU離脱ではなく、EU民主化が基本だと思う。

プロレタリア階級と社会主義の原則は民族を超えた国際的な「友愛と団結」である。当面は反格差反緊縮や移民・難民問題での排外主義反対などの闘争における、EU各国のプロレタリア階級の共同が追求されるべきだろう。長期的には革命による社会主義を基礎とした、平等な国家連合だろう。そこでは広範な分権と自治のために、ブルジョア革命で成立したが分離・独立運動を抱える現存の国家の再編を伴うと思う。(2020.01.14)